Kurume University
Psychological Research 2019, No.18, 1-9

原著

進学動機と入試区分からみた医療系専門学生の学校適応

松　﨑　正　晃[1)]・園　田　直　子[2)]

要　約

本研究では，大学と比較し高い退学率を示している理学療法士・作業療法士養成専門学校の退学要因を検討することを目的に，先行研究から予測される要因である，入学以前（入学動機，入試区分の選択）の状況，入学後（学習適応，学校生活適応，学習方略）の状況に注目した。さらに，入試区分の選択による違いを学年ごとに明らかにすると同時に，学業継続の意思の有無による違いを学年ごとに明らかにすることを目的として質問紙調査を実施した。その結果，入試区分の選択による検討では，１年生では，入学動機の「正課外重視」,「周囲の評価」が有意であり，２年生では，入学動機の「勉学志向」，学業および学校生活適応の「他者性」，学校生活適応感の「居心地の良さ感覚」,「被信頼・受容感」，学習方略の「思考工夫方略」が有意であった。２年生では特に一般入試と比較し高校推薦入試の平均点が有意に高い結果となった。学業継続意思による検討では，１年生では学習方略の「早期解決方略」以外のすべての因子の平均点の差に有意差が認められ，２年生では，入学動機の「正課外重視」,「受験ランク」,「周囲の評価」以外のすべての因子の平均点に有意差が認められた。理学療法士・作業療法士養成専門学校において早期に入学を決定することはプラスの影響があるということが考えられ，学校の本来的機能を重視した入学動機を持つことは，学校生活適応感が高まり，継続希望の意思を示す事が考えられた。

キーワード：入試区分，入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略

問題・目的

文部科学省の学校基本調査（2017）によると，高等教育機関進学率（過年度卒を含む）は80.6％と過去最高の数値を示している。厚生労働省の第５回理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム改善検討会の報告書（2017）によると，理学療法士・作業療法士の学校養成施設は大幅に増加しており，平成29年度（４月現在）において，理学療法士の学校養成施設は，全国256施設の定員数は約14,200人であり，平成11年度（４月現在：施設数107施設，定員数は約3,600人）と比べ約3.9倍の増加，作業療法士の学校養成施設は全国192施設の定員数は約7,700人であり，平成11年度（４月現在：施設数97施設，定員数3,100人）と比べ約2.5倍となっている。坂田・佐久田・奥田・川上（2018）は，進学率の上昇は，大学生の広い意味での多様化の背景となっていると考え，進学率が高まることに伴い，多様なニーズ，学力を持った学生が大学入学して来る事を指摘しており，それは専門学校でも同様の事が言える。このような状況の中，中途退学（以下「退学」と表記する）の増加が問題となっている。

理学療法士・作業療法士養成校の退学状況の報告は，厚生労働省の第１回理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム等改善検討会の資料である，「実態調査の結果」（2018）より，養成校における退学率では，理学療法士の退学率は17.3％，作業療法士では退学率は17.5％となっている。一方，大学・短大・高等専門学校の退学状況は，文部科学省の学生の中途

1) 久留米大学大学院心理学研究科
2) 久留米大学文学部心理学科

退学者や休学等の状況について（2014）によると，平成24年度では，国・公・私立大学，公・私立短期大学，高等専門学校の退学者数は79,311人，退学率が2.65％であった。専門学校の退学状況では，文部科学省の専修学校における生徒・学生支援等に対する基礎調査（2014）によると，平成24年度末の退学者数は30,593人であり，平成22年度末の28,700人に比べ，1,893人増加している。また同発表の「第３章　専修学校調査からみた学生に対する経済的支援の現状」にて，平成22年度から平成24年度の退学者数を平成25年度の在学者数で除して算出した結果，私立の場合，毎年７％程度の学生が退学しており，修行年限が２年であれば14％，３年であれば21％の学生が退学している事を表している。これは，大学と比較し理学療法士・作業療法士養成校や専門学校の退学率が非常に高いことが言え，理学療法士・作業療法士養成校の特に専門学校の退学の要因を検討することが非常に重要であることが言える。

退学の要因を調査した資料として，理学療法士・作業療法士養成校では，厚生労働省の第１回理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム等改善検討会の資料である，「実態調査の結果」（2018）によると，理学療法士が経済的理由8.8％，身体的理由3.3％，精神的理由9.2％，留年23.8％，その他の理由が55.2％となっており，作業療法士では，経済的理由7.8％，身体的理由3.6％，精神的理由15.1％，留年21.4％，その他の理由が52.1％となっている。退学理由の大半が「その他」であり，具体的な退学要因が明らかとなっていない。専門学校での調査では，文部科学省の専修学校における生徒・学生支援等に対する基礎調査（2014）によると，退学区分について，平成24年度末では進路変更36.8％，学業不振19.1％，学校生活不適応12.8％の順で多い結果となっている。そのため，理学療法士・作業療法士養成校の退学の要因として，学業不振，学校生活不適応であることは予測される。

その他の退学の要因として，入試区分の選択がある。読売新聞教育取材班の大学の実力2017（2016）によると，入試方法別での退学率は，Admissions Office（AO）入試で13.8％，指定校推薦8.0％，公募制推薦8.5％，付属・系列校からの推薦6.9％と早期に入学が決まる学生でより退学率が高くなることを示しており，定員充足のための安易な施策は退学の増加につながると指摘している。

次に，退学年次の調査では，独立行政法人労働政策研究・研修機構の大学等中退者の就労と意識に関する研究（2015）によると，大学の退学したときの学年は１年生12.3％，２年生28.4％，３年生26.4％，４年生以上32.9％であり，専門学校は１年生53.1％，２年生35.9％，３年生6.3％，４年生以上4.7％であり，退学する学生は，大学は４年生以上で退学する割合が高く，専門学校は１年生で半分以上の学生が退学し，２年生を含めると８割以上の学生が退学している。そのため，専門学校の退学の要因を検討する上で１年生，２年生と学年別に検討する必要があると考える。学年別の退学・不適応要因の先行研究では，１年生の場合，この学部でやっていけるのかという勉学に対する自らが入学時に持っていたイメージと現実のギャップがあること（小塩・願興寺・桐山，2007；馬込・尾崎，2008），大学の不登校に関する要因の検討を行った調査では，不登校の転機で最も多かったものは退学であり，不登校になるケースは「不本意入学」を背景に持つ学生が２年生より１年生に多く，「学習意欲の低下」の背景がある割合も２年生よりも１年生に多い傾向であること（松高，2016），１年次では成績平均群と比較し成績下位群では学習面での適応が低いこと（田中，2016）などが挙げられ，１年生の退学・不適応の要因として，「不本意入学」，「学習意欲の低下」が背景として挙げられている。２年生の場合，現実的な単位取得や恋愛関係といった入学後に生じた課題や人間関係に悩みが移っていること（小塩・願興寺・桐山，2007；馬込・尾崎，2008），２年次では成績平均群と比較し成績下位群では学習習慣が身についておらず，大学での学びへの興味，関心が低く，睡眠の問題や物事への取りかかりの問題を抱えており，自己評価が低いこと（田中，2016）などが挙げられ，２年生では，学業に対しての適応だけではなく，環境への適応感，人間関係，生活習慣の乱れなどの背景が挙げられる。以上報告をまとめると，退学や学業継続の意思に影響を及ぼす要因として，「学業不振」，「学校生活（学業，対人，環境）不適応」，「入試区分の選択」，「入学動機（不本意入学）」が挙げられ，学年によってそれらの要因に影響される大きさが異なることが考えられる。

上記調査，研究は主に４年制大学の報告であり，専門学校の退学は大半が１年次であり，入学する時点から４年制大学との違いがあると考えられ，理学療法士・作業療法士養成専門学生を対象に検証する必要があると考える。

そのため本研究では，理学療法士・作業療法士養成専門学生を対象に，入試区分の選択と入学動機，入学後（学業適応，学校生活適応，学習方略）の状況との

関係を検討し，入試区分の選択が入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略に及ぼす影響を明らかにすると同時に，入学以前（入学動機，入試区分の選択）の状況，入学後（学習適応，学校生活適応，学習方略）の状況と学業継続の意思との関係を学年別に検討し，学年ごとに学業継続の意思に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とする。

考えられる仮説として，早期に入学が決まるものほど，退学傾向となることが予測され，入学動機の低さ，学業適応，学校生活適応感の低さ，学習の仕方（学習方略）が分からずに学業不振に陥る事が予測される。また先行研究で言及されているように，学年ごとにそれらの要因に影響される大きさが異なることが予測される。そのため，分析１では入試区分の違いが，入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略がどのように異なるかについて学年ごとに検討を行う。分析２では学業継続意思の有無によって入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略がどのように異なるかについて学年ごとに検討を行う。

方　法

調査参加者

九州圏内の専門学校４校の専門学生570名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙に回答した542名（男性296名，女性246名，平均年齢19.64歳 ±3.18，理学療法学科400名，作業療法学科142名，１年生297名，２年生245名）を分析対象とした。

質問紙構成

１．基本情報

性別，年齢，学年，学校名，学科，学籍番号の下２桁について回答を求めた。

２．入試区分

専門学校の入試区分である，AO 入試，高校推薦入試，一般入試，社会人入試，特待生入試のいずれかについて，自身が受験した入試区分の回答を求めた。

３．入学動機　大学進学理由尺度（三保・清水，2011）

入学動機を測定する尺度として三保・清水（2011）によって作成された大学進学理由尺度を使用した。「勉学志向」９項目，「正課外重視」12項目，「受験ランク」７項目，「周囲の評価」11項目の計39項目について，一部専門学生に向け改変し，「あてはまる」から「あてはまらない」の４件法で回答を求めた。

４．学業および学校生活適応　リハビリテーション医療系大学生における学業および大学生活適応尺度（西田ら，2014）

学業の適応を測定する尺度として西田ら（2014）によって作成されたリハビリテーション医療系大学生における学業および大学生活適応尺度を使用した。「感情・心理因子」６項目，「積極性因子」６項目，「適合感因子」４項目，「他者性因子」３項目，「自己対処因子」３項目の計22項目について，一部専門学生に向け改変し，「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答を求めた。

５．学校生活適応感　大学生用適応感尺度（大久保・青柳，2003）

個人が環境と適合している時の主観的な認知や感情を測定する尺度として，大久保・青柳（2003）によって作成された大学生用適応感尺度を使用した。「居心地の良さの感覚」10項目，「被信頼・受容感」６項目，「課題・目的の存在」７項目，「拒絶感の無さ」６項目の計29項目について，一部専門学生に向け改変し，「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法で回答を求めた。

６．学習方略　落合（2014）

学習方略を測定する尺度として，落合（2014）によって作成された学習方略を問う質問項目を使用した。講義に関する項目である「思考工夫方略」「行動工夫方略」の２因子６項目，課題に関する項目である「早期解決方略」「完成度向上方略」「友人利用方略」の３因子12項目，自己調整学習方略は藤田（2010）の尺度を落合が変更を加えたものである「プランニング方略」「モニタリング方略」の２因子10項目の計28項目について，一部専門学生に向け改変し，「あてはまる」から「あてはまらない」の５件法で回答を求めた。

７．学業継続意思

学業継続意思について「継続していきたいと考えている」，「継続していくかどうか悩んでいる」，「やめたいと思っている」から回答を求めた。「継続していくかどうか悩んでいる」，「やめたいと思っている」と答えた方については，独立行政法人労働政策研究・研修機構の大学等中退者の就労と意識に関する研究（2015）の大学等を中途退学された方の働き方と意識に関する調査の質問項目を使用し，理由の回答を求めた。

倫理的配慮

倫理的配慮として，調査協力が任意であること，回答の可否によって個人への不利益が生じることがない

こと，回答の途中で辞退できること，全ての回答の選択肢に「答えたくない」という選択肢を設け答えたくない質問は答えなくてよいこと，回答データについては統計的に処理し個人が特定できない形で使用すること，研究を公表する際には個人が特定される情報は一切公表しないことを調査協力者に対して本研究の趣旨を文章・口頭にて十分に説明し同意欄へのチェックによる同意を得た。

手続き

2018年の８月に質問紙調査を実施した。質問紙の実施は，Google フォームを使用し回答を求めた。

分析１では，入試区分を答えた学生534名（平均年齢：19.65歳 ±3.20，男性290名，女性244名，理学療法学科394名，作業療法学科140名，１年生292名，２年生242名）を分析の対象とした。なお入試区分の内訳は，AO 入試184名（１年生95名，２年生89名），高校推薦入試234名（１年生136名，２年生98名），一般入試46名（１年生24名，２年生22名），社会人入試19名（１年生10名，２年生９名），特待生入試51名（１年生28名，２年生24名）であった。入試区分ごとの比較検討を行った。

分析２では，質問紙に回答した542名（男性296名，女性246名，平均年齢19.64歳 ±3.18，理学療法学科400名，作業療法学科142名，１年生297名，２年生245名）を分析対象とした。なお，学業継続意思の内訳は，「継続していきたいと考えている」と回答したもの（以下継続希望群）449名（１年生250名，２年生199名），「継続していくかどうか悩んでいる」と回答したもの37名（１年生22名，２年生15名），「やめたいと思っている」と回答したもの24名（１年生10名，２年生14名），「答えたくない」と回答したもの32名（１年生15名，２年生17名）であった。「継続していくかどうか悩んでいる」，「やめたいと思っている」，「答えたくない」と回答した93名については学業継続を悩んでいるものと考え，３群をまとめ継続検討群とし，継続希望群との比較検討を行った。

分析対象とした542名のデータについて，各因子の平均点を求めた。

結　　果

分析１

入試区分による入学動機，学業および学校生活適応，学校生活適応感，学習方略の違いを明らかにするために，入試区分を説明変数，入学動機，学業および学校生活適応，学校生活適応感，学習方略の各因子を目的変数とする分散分析をおこなった。有意差が認められた各因子の平均値および標準誤差を Figure １，２に示す。

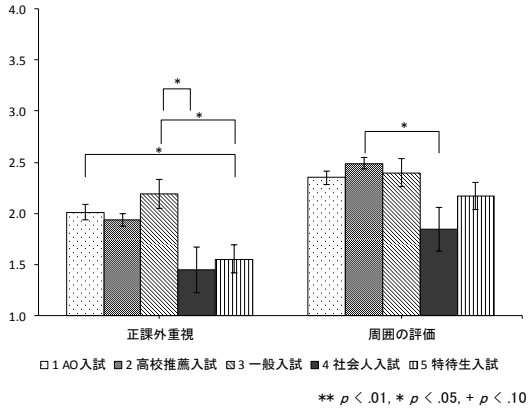

Figure 1.　１年の入試区分別の各尺度の平均値と分散分析（エラーバーは標準誤差）

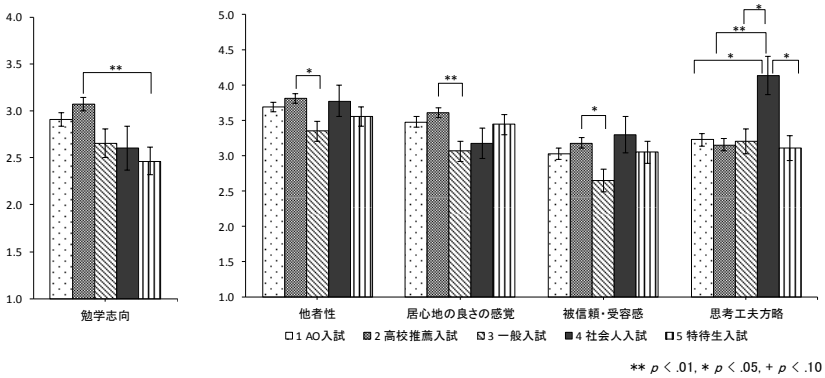

Figure 2.　２年の入試区分別の各尺度の平均値と分散分析（エラーバーは標準誤差）

1年生では，入学動機の「正課外重視」が有意（$F(4,285)=4.21$，$p<.01$）であり，Holm 法を用いた多重比較の結果，社会人入試と特待生入試に比べ一般入試の平均点は有意に高く（$p<.05$），特待生入試に比べ AO 入試の平均点が有意に高かった（$p<.05$）。また，入学動機の「周囲の評価」が有意（$F(4,286)=3.25$，$p<.05$）であり，Holm 法を用いた多重比較の結果，社会人入試に比べ高校推薦入試の平均点は有意に高かった（$p<.05$）。

2年生では，入学動機の「勉学志向」が有意（$F(4,237)=4.79$，$p<.01$）であり，Holm 法を用いた多重比較の結果，特待生入試に比べ高校推薦入試の平均点は有意に高かった（$p<.01$）。次に，学業および学校生活適応では，「他者性」が有意傾向（$F(4,237)=2.40$，$p<.10$）であり，Holm 法を用いた多重比較の結果，一般入試に比べ高校推薦入試の平均点は有意に高かった（$p<.05$）。学校生活適応感では，「居心地の良さ感覚」が有意（$F(4,237)=3.49$，$p<.01$）であり，Holm 法を用いた多重比較の結果，一般入試に比べ高校推薦入試の平均点は有意に高かった（$p<.01$）。また「被信頼・受容感」も有意（$F(4,237)=2.53$，$p<.05$）であり，Holm 法を用いた多重比較の結果，一般入試に比べ高校推薦入試の平均点は有意に高かった（$p<.05$）。学習方略では「思考工夫方略」が有意（$F(4,236)=3.06$，$p<.05$）であり，Holm 法を用いた多重比較の結果，AO 入試，一般入試，特待生入試に比べ社会人入試の平均点は有意に高く（$p<.05$），高校推薦入試に比べ社会人入試の平均点は特に有意差を認めた（$p<.01$）。

分析２

学業継続意思の有無によって，入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略がどのように異なるかを明らかにするために，入学動機，学業および学校生活適応，学校生活適応感，学習方略の各因子を説明変数，学業継続意思を目的変数とする t 検定をおこなった。各学年の各因子の平均値および標準偏差を Table 1，2に示す。

1年生では，学習方略の「早期解決方略」以外のすべてに有意な差があり，継続希望群が継続検討群より因子の平均点が高かった。2年生では，入学動機の「正課外重視」,「受験ランク」,「周囲の評価」以外のすべてに有意な差があり，継続希望群が継続検討群より因子の平均点が高かった。

Table 1.
継続希望群と継続検討群の各尺度の平均値と t 検定結果（1年）

	継続希望 (N=250)		継続検討 (N=47)	t 値	効果量 d
勉学志向	3.25 (0.57)	>	2.63 (0.73)	$t(55)=5.52$ **	d=1.05
正課外重視	1.98 (0.72)	>	1.64 (0.70)	$t(63)=3.00$ **	d=0.47
受験ランク	2.07 (0.66)	>	1.81 (0.62)	$t(65)=2.62$ *	d=0.40
周囲の評価	2.44 (0.68)	>	2.08 (0.62)	$t(66)=3.61$ **	d=0.55
感情・心理	3.62 (0.55)	>	2.90 (0.75)	$t(55)=6.24$ **	d=1.21
自発性	3.33 (0.54)	>	2.69 (0.73)	$t(55)=5.66$ **	d=1.10
適合感	3.54 (0.59)	>	2.57 (0.72)	$t(58)=8.77$ **	d=1.59
他者性	3.83 (0.59)	>	3.13 (0.75)	$t(57)=6.00$ **	d=1.12
自己対処	3.33 (0.61)	>	2.91 (0.81)	$t(56)=3.35$ **	d=0.65
居心地の良さの感覚	3.69 (0.57)	>	2.98 (0.68)	$t(58)=6.69$ **	d=1.20
被信頼・受容感	3.22 (0.53)	>	2.71 (0.66)	$t(57)=4.97$ **	d=0.91
課題・目的の存在	3.75 (0.59)	>	2.95 (0.63)	$t(61)=8.02$ **	d=1.34
拒絶感の無さ	3.72 (0.64)	>	3.07 (0.72)	$t(60)=5.78$ **	d=1.00
思考工夫方略	3.45 (0.75)	>	3.08 (0.79)	$t(62)=2.96$ **	d=0.49
行動工夫方略	3.82 (0.74)	>	3.37 (0.96)	$t(56)=3.04$ **	d=0.57
早期解決方略	3.39 (0.82)	=	3.18 (1.019)	$t(57)=1.38$	d=0.25
完成度向上方略	3.42 (0.70)	>	3.12 (0.68)	$t(66)=2.78$ **	d=0.43
友人利用方略	4.33 (0.63)	>	3.63 (0.87)	$t(55)=4.87$ **	d=0.96
プランニング方略	3.51 (0.66)	>	3.18 (0.69)	$t(62)=3.00$ **	d=0.49
モニタリング方略	3.61 (0.70)	>	3.15 (0.85)	t(58)=3.50 **	d=0.64

カッコ内は標準偏差　　** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

Table 2.
継続希望群と継続検討群の各尺度の平均値と t 検定結果（2年）

	継続希望 (N＝199)		継続検討 (N＝45)	t 値	効果量d
勉学志向	2.98 (0.67)	>	2.54 (0.79)	$t(57)=3.44$ **	$d=0.63$
正課外重視	1.91 (0.71)	=	2.06 (0.86)	$t(56)=-1.07$	$d=-0.20$
受験ランク	2.04 (0.69)	=	2.13 (0.75)	$t(58)=-0.66$	$d=-0.12$
周囲の評価	2.21 (0.71)	=	2.15 (0.84)	$t(57)=0.40$	$d=0.07$
感情・心理	3.64 (0.59)	>	2.80 (0.97)	$t(51)=5.61$ **	$d=1.24$
自発性	3.29 (0.59)	>	2.60 (0.87)	$t(53)=5.09$ **	$d=1.07$
適合感	3.47 (0.64)	>	2.36 (0.89)	$t(54)=7.89$ **	$d=1.59$
他者性	3.79 (0.61)	>	3.24 (0.87)	$t(54)=4.02$ **	$d=0.83$
自己対処	3.39 (0.66)	>	2.69 (0.89)	$t(56)=4.95$ **	$d=0.98$
居心地の良さの感覚	3.57 (0.59)	>	3.03 (0.89)	$t(53)=3.93$ **	$d=0.83$
被信頼・受容感	3.20 (0.66)	>	2.44 (0.95)	$t(54)=5.16$ **	$d=1.06$
課題・目的の存在	3.64 (0.58)	>	2.86 (0.77)	$t(55)=6.39$ **	$d=1.25$
拒絶感の無さ	3.63 (0.67)	>	3.128 (0.91)	$t(55)=3.48$ **	$d=0.69$
思考工夫方略	3.32 (0.75)	>	2.72 (1.06)	$t(52)=3.58$ **	$d=0.74$
行動工夫方略	3.68 (0.76)	>	3.20 (0.94)	$t(57)=3.20$ **	$d=0.61$
早期解決方略	3.39 (0.82)	>	2.86 (0.81)	$t(65)=3.96$ **	$d=0.65$
完成度向上方略	3.30 (0.71)	>	2.80 (0.90)	$t(56)=3.51$ **	$d=0.67$
友人利用方略	4.10 (0.69)	>	3.73 (0.93)	$t(55)=2.52$ *	$d=0.50$
プランニング方略	3.27 (0.79)	>	2.79 (0.88)	$t(61)=3.35$ **	$d=0.59$
モニタリング方略	3.40 (0.81)	>	2.74 (0.93)	$t(59)=4.42$ **	$d=0.80$

カッコ内は標準偏差　　** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

考　察

本研究では，大学と比較し高い退学率を示している理学療法士・作業療法士養成専門学校の退学要因を検討することを目的に，先行研究から予測される要因である，入学以前（入学動機，入試区分の選択）の状況，入学後（学習適応，学校生活適応，学習方略）の状況に注目した。さらに，入試区分の選択による，入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略の違いを学年ごとに明らかにすると同時に，学業継続の意思の有無による入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略の違いを学年ごとに明らかにすることを目的として質問紙調査を実施した。

入試区分の選択による入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略の違い

分析１で入学動機，入試区分を説明変数，入学動機，学業および学校生活適応，学校生活適応感，学習方略の各因子を目的変数とする分散分析をおこなった結果，入試区分の選択によって，入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略が学年ごとに異なることが明らかとなった。

１年生では，入学動機である「正課外重視」が一般入試と AO 入試で，「周囲の評価」が高校推薦入試で有意に高い結果となった。まず，「正課外重視」は，「専門学校で遊びたいから」や「課外活動（クラブ・サークルなど）を楽しみたいから」など学校での学習の副次的機能の因子である。理学療法士・作業療法士養成専門学校は国家資格の取得が就学する大きな目的であるため，クラブ・サークルなどの課外活動が大学と比較し充実していない学校が多い。一般入試は他の学校（大学や他の専門学校）と併願が可能な入試区分であり，一般入試入学者は国家資格の取得のみならずクラブ・サークルなどの課外活動も充実した学校生活を送りたいと望んでいる事が考えられる。AO 入試は学校専願で受験する区分であり，理学療法士・作業療法士養成専門学校の本来的機能である国家試験の取得を重要視し入学している事が考えられるが，特待生入試より因子の平均点が高い結果となっている。AO 入試は他の入試区分と比較し入試内容も少なく，早期に入学が決まることも多く，学校の本来的機能，副次的機能を十分に考慮できずに入学をしている事が考えられる。次に，「周囲の評価」は「世間一般の評価を考慮したから」や「周囲の人が勧めるから」など学校が持つ社会的な評価を意識しており，他律的な指向性を示し

ているものである。社会人入試と比較し高校推薦入試で因子の平均点が高い理由として，社会人入試での入学者は最短で資格を取得するという学校の本来的機能を自律的に選択し入学する傾向にあり，高校推薦入試での入学者は保護者や友人など周囲の人の勧めや学校の雰囲気も考慮し入学する傾向にあることが考えられる。しかし，１年生の結果は，入試区分の選定が学業適応，学校生活適応，学習方略などの退学や学業継続意思に影響する要因への関係は認められなかった。

２年生では，入学動機の「勉学志向」が特待生入試と比較し高校推薦入試が，学業および学校生活適応の「他者性」，学校生活適応感の「居心地の良さ感覚」と「被信頼・受容感」が一般入試と比較し，高校推薦入試が高い結果となった。高校推薦入試は一般入試，特待生入試と比較し，早期に入学が決定する入試区分である。この結果は，早期に入学が決まるものほど退学傾向となり，入学動機の低さ，学業適応，学校生活適応感の低さ，学習の仕方（学習方略）が分からずに学業不振に陥るという仮説を一部棄却するものとなった。

その理由として，高校推薦入学者は学校専願で入学するが，一般入試入学者は他の学校（大学や他の専門学校）との併願が可能であり，一般入試入学者は高校推薦入学者と比較し不本意入学を背景に持つ学生が多かったと言える。長尾（2009）は，将来希望する職業が明確であるものは，四大進学・短大進学・就職よりも専門学校への進学を有意に希望しやすいと報告していており，併願が可能な一般入試入学者と比較し，学校専願である高校推薦入学者は適応が高い結果となった。また，「他者性」は「勉強に困った時は相談できる人がいる」など援助者を含め周囲との関わりを示す因子，「居心地の良さ感覚」は「周囲に溶け込めている」や「周りの人と楽しい時間を共有できている」など，環境や対人に対しての気楽な居心地の良さを示す因子，「被信頼・受容感」は「他の人から頼られていると感じる」などの他者からの信頼感や受容感を示す因子である。先行研究では，２年生の退学・不適応要因として学業に対しての適応だけではなく，環境への適応感，人間関係，生活習慣の乱れなどの背景が挙げられているが，一般入試入学者は高校推薦入学者と比較し，特に対人の適応感が低下する可能性が明らかとなった。早期に入学を決定することはプラスの影響があり，この結果は４年生大学とは逆の結果となった。

学習方略の思考工夫方略は社会人入試が他の入試区分と比較し有意に高かった。社会人入試入学者は国家資格取得への指向の高さが他の入試区分よりも高いことが考えられ，効率的に知識を得るため，関連付けながら学習を行っているものと考えられる。

学業継続の意思の有無による入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略の違い

分析２では学業継続意思の有無によって，入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略がどのように異なるかを明らかにするために，入学動機，学業および学校生活適応，学校生活適応感，学習方略の各因子を説明変数，学業継続意思を目的変数とする t 検定をおこなった結果，学年によって入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略に及ぼす影響が異なることが明らかとなった。

１年生では，学習方略の「早期解決方略」以外のすべての因子の平均点の差に有意差が認められた。「早期解決方略」に有意差が認められなかった理由としては，１年生の前期のカリキュラムは解剖学や生理学などの「基礎医学」の科目や，理学療法士・作業療法士の基礎となる科目がメインであり，知識を得ることが主体であるため，自身の考えを述べる授業が少ないことが考えられる。「早期解決方略」は「提出期限に間に合うように早めに取りかかる」など課題に対して早期に解決する因子である。そのため，１年前期の時期ではレポートの提出を求められることも少ないことが考えられ，「早期解決方略」に有意差が認められなかったことが考えられる。

２年生では，入学動機の「正課外重視」，「受験ランク」，「周囲の評価」以外のすべての因子の平均点に有意差が認められた。入学動機の「勉学志向」は，「専門知識を深めたいから」，「学びたいことがあるから」，「専門的技術を修得したいから」学校の本来的機能を重視した自律的な動機である。磯部・上村（2007）は，大学生を対象に取得できる資格と就職が結びついている学部の学生とそうでない学部の学生の適応感と進学動機の関連を検討した結果，前者は進学動機と友人関係が適応感に影響を及ぼし，後者は学業と教師との関係が適応感に影響を及ぼすことを報告している。また中野ら（2010）は医療系専門学生を対象に進学動機が学校適応感の影響を検討した結果，「専門職に関連する分野の学習に向いていると思ったから」など自己の適正を考慮した進学動機は，適応感を高めることを報告している。そのため，２年生の継続希望群は，学校の本来的機能を重視した入学動機を持ち進学した結果，学校生活適応感が高まり，継続希望の意思を示したことが考えられた。

まとめ

今回の結果として，まず入試区分の選択によって入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略が異なり，特に２年生では一般入試と比較し高校推薦入試の平均点が有意に高いことが分かった。この結果は，大学生を対象とした調査結果から予測された，早期に入学が決まるものほど，退学傾向となり，学業適応，学校生活適応感の低くなる事と反対であり，理学療法士・作業療法士養成専門学校において早期に入学を決定することはプラスの影響があるということが考えられた。また，継続希望群と継続検討群の入学動機，学業適応，学校生活適応感，学習方略が異なることが分かった。特に２年生は，入学動機で「勉学志向」のみ異なっており，継続希望群は学校の本来的機能を重視した入学動機を持つことで，学校生活適応感が高まり，継続希望の意思を示したことが考えられた。今回の調査は定期試験前の情報であり学業成績との関連を検討することが出来なかったため，継続希望群，継続検討群の学業継続意思の推移を確認するとともに，学業継続意思と学業成績との関連を検討し，学業継続意思に与える影響を検討していきたい。

引用文献

独立行政法人労働政策研究・研修機構（2015）大学等中退者の就労と意識に関する研究　Retrieved from https://www.jil.go.jp/institute/research/2015/documents/0138.pdf.（2018年６月15日）

磯部有希・上村佳世子（2007）．大学の進学動機と適応感との関連　文京学院大学人間学部研究紀要，９(1)，51-61

厚生労働省（2017）．第５回理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム改善検討会（資料２　報告書（案））Retrieved from http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000189580.pdf.（2018年４月24日）

馬込武志・尾崎剛志（2008）．学生の退学要因と退学回避の方策について：卒業時アンケートを参考にして，湊川短期大学紀要，44，69-74

松高由佳（2016）．大学生の不登校に関する要因の検討　広島文教女子大学心理臨床研究，７，1-8

三保紀裕・清水和秋（2011）．大学進学理由と大学での学習観の測定：尺度の構成を中心として，キャリア教育研究 29(2)，43-55

文部科学省（2014）．学生の中途退学者や休学等の状況について　Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/__icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf.（2018年４月24日）

文部科学省（2017）．平成29年度学校基本調査（確定値）の公表について Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2018/02/05/1388639_1.pdf.（2018年６月15日）

文部科学省（2014）．専修学校における生徒・学生支援等に対する基礎調査　Retrieved from http://pari.u-tokyo.ac.jp/unit/fsu_h25.pdf.（2018年６月15日）

長尾由希子（2009）．専門学校への進学希望にみるノン・メリトクラティックな進路形成（東京大学教育学部比較教育社会学コース Benesse 教育研究開発センター共同研究都立高校生の生活・行動・意識に関する調査報告書；学習に対する意識と進路決定）研究所報，49，109-125

中野良哉・中屋久長・山本双一・山﨑裕司・平賀康嗣・片山訓博・重島晃史・高地正音（2009）．医療系専門学校生の進学動機と学校適応感　高知リハビリテーション学院紀要，11(0)，13-18

西田斉二・田丸佳希・宮嶋愛弓・杉原勝美・川上永子・松下太・銀山章代・上田任克（2014）．リハビリテーション医療系大学生における学業および大学生活適応尺度の作成　四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要，10，25-29

落合良香（2014）．大学生の学習方略に関する検討：目標志向性が方略仕様に与える影響に着目して　人間文化研究科年報（奈良女子大学大学院人間文化研究科），第29号,. 101-116

大久保智生・青柳肇（2003）．大学生用適応感尺度の作成の試み ― 個人－環境の適合性の視点からパーソナリティ研究 12(1)，38-39

小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2007）．大学退学者の入学時における悩みの特徴　日本教育心理学会総会発表論文集，日本教育心理学会，293

坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩（2018）．大学生活充実度と大学へのリテンションとの関連―SoULS-21を用いた縦断的研究―　大阪樟蔭女子大学研究紀要，第８巻，39-49

田中亜裕子（2016）．大学不適応学生の個性に応じた支援策の検討　教育総合研究叢書，９，19-24

読売新聞教育ネットワーク事務局（2016）．大学の実力2017　中央公論新社

School adaptation of medical specialist students as seen from motivation and entrance examination classification.

Masaaki Matsuzaki (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)
Naoko Sonoda (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

In this research, we aimed to examine the dropout factors of physical therapists and occupational therapist education vocational schools that showed a higher withdrawal rate than universities. We looked at the situation before the admission (entrance motive, selection of entrance examination classification) and the situation after enrollment (learning adaptation, school life adaptation, learning strategy) which are factors predicted from the previous research. In addition to clarifying the differences by selection of the entrance examination class for each grade, a questionnaire survey was conducted to clarify the difference depending on whether there is intention to continue studying for each grade. As a result, it is conceivable that deciding early admission at a physical therapists and occupational therapist education vocational schools has a positive influence, it is thought that having an entrance motivation that emphasizes the original function of the school was thought to show a willingness to continue as the sense of adaptation for school life increased.

Keywords: entrance examination classification, entrance motive, learning adaptation, school life adaptation, learning strategy